

学位論文の内容の要旨

専攻	医学	部門	(平成27年度以前入学者のみ記入)
学籍番号	17D709	氏名	合田 康宏
論文題目	Long-term outcomes of Over-The-Scope Clip for refractory gastrointestinal diseases		

(論文要旨)

【背景と目的】 Over-The-Scope Clip (OTSC) は、難治性消化器疾患に対して迅速に応急処置を施すことが出来る内視鏡的デバイスである。しかしながら、現在までのほぼすべての報告は観察期間が半年以下の短期的なものであり、その中長期的な安全性、効果、患者予後や背景などは不明であり詳しい報告がなされていなかった。今回我々は、留置されたクリップの臨床転帰や長期的な傾向、合併症の有無などの特徴を検討した。

【方法】 OTSCクリップの治療を受けた47人の患者のうち、3ヶ月以上の期間で追跡可能だった35人を遡及的に検討した。症例の内訳は11例の難治性消化管出血、17例の消化管穿孔、7例の瘻孔疾患であった (Figure 1)。観察期間の定義は、中期 (3か月から12か月)、長期 (≥12か月) と定義した。Primary Outcomeを臨床的原疾患無再発率とし、Secondary Outcomeとして合併症率、生存期間、およびクリップ保持率としてデータを検討した。

【結果】 全観察期間における臨床的無再発率は100% (観察期間の中央値44か月、観察期間の範囲3~78か月) であり、難治性十二指腸穿孔やPEGの瘻孔に対しても有効性が確かめられた (Figure 2)。合併症に関しては、35例中1例のみS状結腸における憩室出血に対して、クリップ施行50カ月後に粘膜下にcavityが認められた (Figure 3)。全体として合併症率は2.9% (n = 1) であった。患者予後生存期間の中央値は、出血症例で1634日、穿孔症例で1757日、瘻孔症例で444日であった。全体のクリップ保持率は、1、6、および12か月後、および最終フォローアップ時に、それぞれ56.4%、38.1%、30.9%、および25.9%であった。クリップの平均保持期間は、出血で244日、穿孔で656日、瘻孔で188日となった。

Figure 1.

--	--

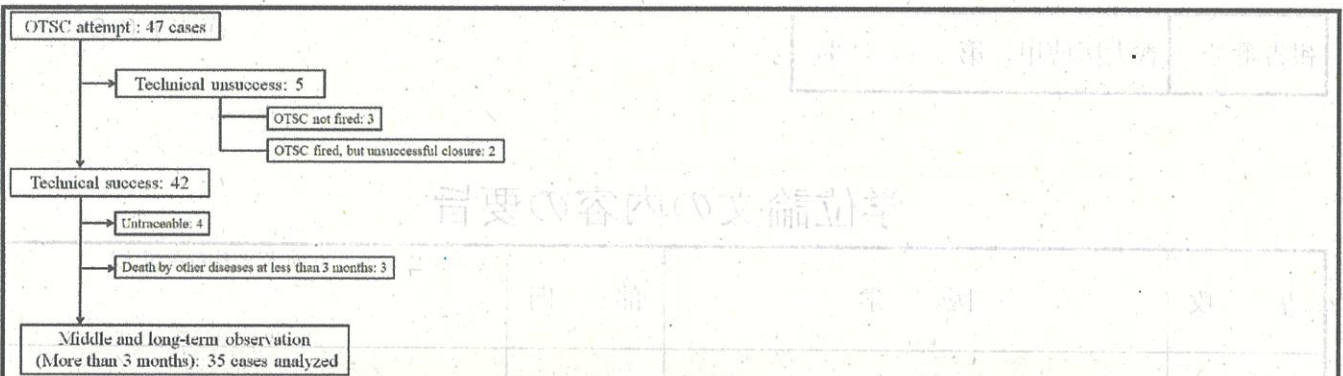


Figure 2.

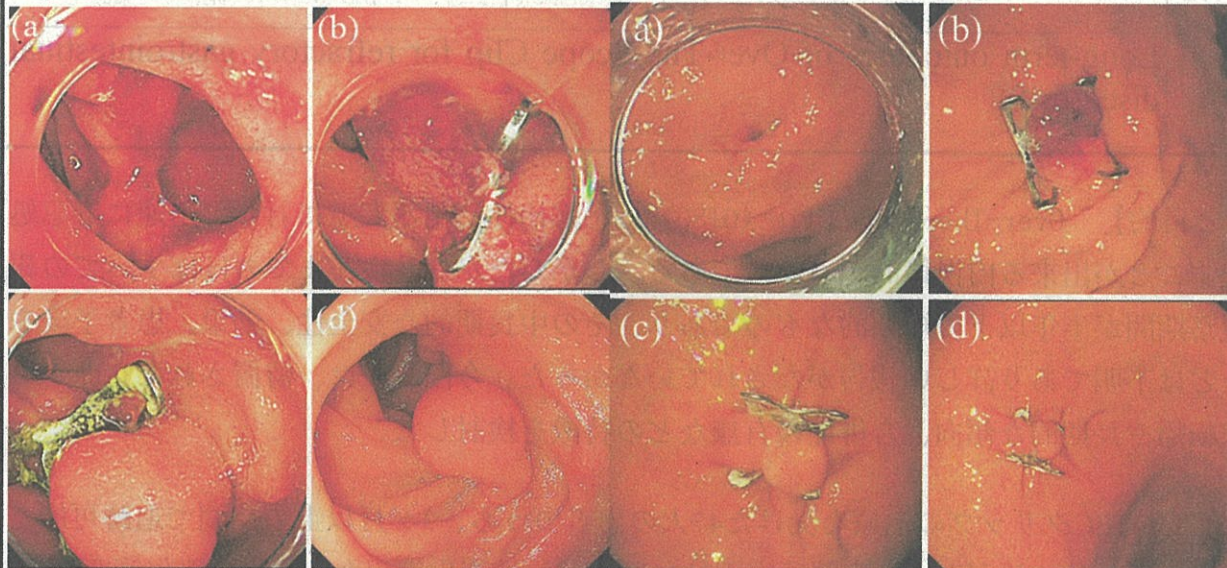
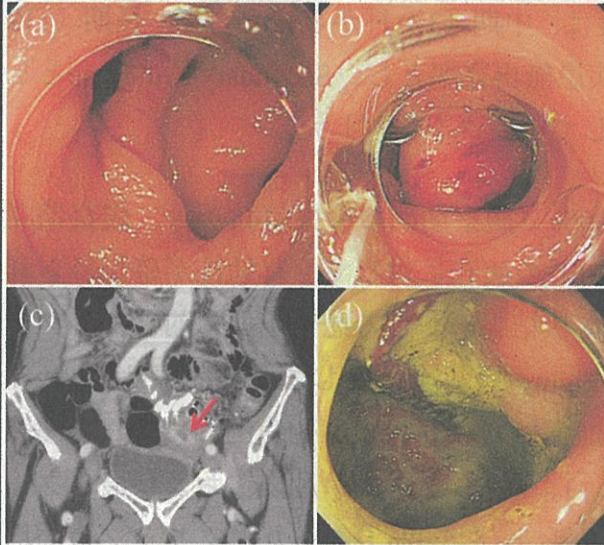


Figure 3.



掲載誌名	Minimally Invasive & Allied Technology		
		第	巻, 第
		号	
(公表予定) 掲載年月	2020年 12月	出版社(等)名	Taylor & Francis
Peer Review	有	無	

(備考) 論文要旨は、日本語で1, 500字以内にまとめてください。